

## 私が目指す「草の根式国際支援」

東京大学教育学部附属中等教育学校 6年 鈴木 千尋

私は将来 JICA にて開発途上国での草の根技術協力事業に携わりたいと思っている。なぜなら、今日多くの先進国が最新技術を用いて国際支援を行っている。これは現地にとって最新技術によりもたらされる産業であり、維持していくことは難しい。現地の資源を利用することで人々が自立し、将来自分たちの力で産業を作っていける手助けをする国際支援がより必要ではないか。これこそが、私が理想とする国際支援方法なのである。

私は幼い頃から募金活動やユニセフの方のお話で開発途上国支援について知る機会が多く、自分たちとの環境の差に幼いながらも非常に驚いた。その後、2度の転機が私に訪れた。1度目は中学2年の頃、初めて草の根式国際支援方法を知ったことだ。課題図書で偶然読んだ本がアフリカで井戸を作って水を届けるといった内容だった。その手法は最新技術ではなく、江戸～明治時代に日本で考案された伝統的手法である「上総掘り式」だった。

このように先人の知恵を利用し、人々の生活水準にあった支援方法を柔軟に生み出していることに私は感銘を受けた。これをきっかけに草の根式支援方法に興味を抱き、調べるようになった。2度目は高校1年の頃、オンライン英会話でフィリピン人の先生と会話をする中で、現地について知ったことだ。私にとって、フィリピンは常夏のリゾート地というイメージであった。しかし実際は、中心部やリゾート地とそれ以外の地域では貧富の差が激しく、産業も少ないため大学卒業後も定職に就くこと難しいのだという。私は、大人たちに向けた支援により雇用を生み出すことが子どもたちへの支援、そして地域の産業発展にもつながっていくと考えた。

そこで私は高校生活の集大成としての卒業研究のテーマを「設備投

資に頼らずその土地で得られる資源を用い、現地の人々が自立していくことができるような、生産→流通→消費といったビジネスモデルを提案することを目的とした支援方法」に決めた。目標は私の考えた小さなコミュニティでの事業が定着し将来的には地域を拡大した事業となることである。対象地域の条件は海があることとし、資源は海藻とした。私たちの先祖は海と共に生きてきた。島国の日本人が育ててきた海洋資源の利用方法が活かしやすいと考えたからである。また魚の捕獲に比べ、自生する海藻であれば費用を抑えられると考えたからである。場所は英会話の先生から得た情報、本や論文等の情報からフィリピンとし、特に貧困層との格差が激しいセブ島に絞った。また、現地では健康問題も深刻である。料理の味が濃く、貧困層の人々は高カロリーな食事を摂りエネルギーを得ようとする。よって高血圧症を患う人が多いのだ。私はこの事業により雇用が増えるだけでなく、このような問題も解決できる資源が理想だと考えた。現地の気候や環境と社会問題を考え、最も適した海藻は不稔性アオサである。アオサは高血圧症の元となる塩分の排出を促す。専門家によるとフィリピンでもこの種は見られるという。そして不稔性アオサの魅力はこれだけではない。この種は環境浄化機能も特に優れているのだ。フィリピンにはこの不稔性アオサが存在しているにも関わらず現地ではごみとして扱われ、食されていないのだ。これを事業として確立できれば、将来大きな変化をもたらすのではないか。アオサを加えた料理が受け入れられれば、新たな食文化が生まれ、同時に人々の健康を促進することが期待できる。これはSDGsの本質を突き、持続可能な社会を形成する根幹にあるものではないか。研究を進める中で、専門家の先生が仰った「水産の王道は食すことである」という言葉そのものだ。

この研究を通じ、今ある資源から色々な可能性を見出すことができた。私はこれから大学へ進学し、より専門的で実践的な学びを深め今回の研究を実現できるよう一步一步進んでいきたいと思う。